

生まれたて銀河観測／100万年前の氷掘削

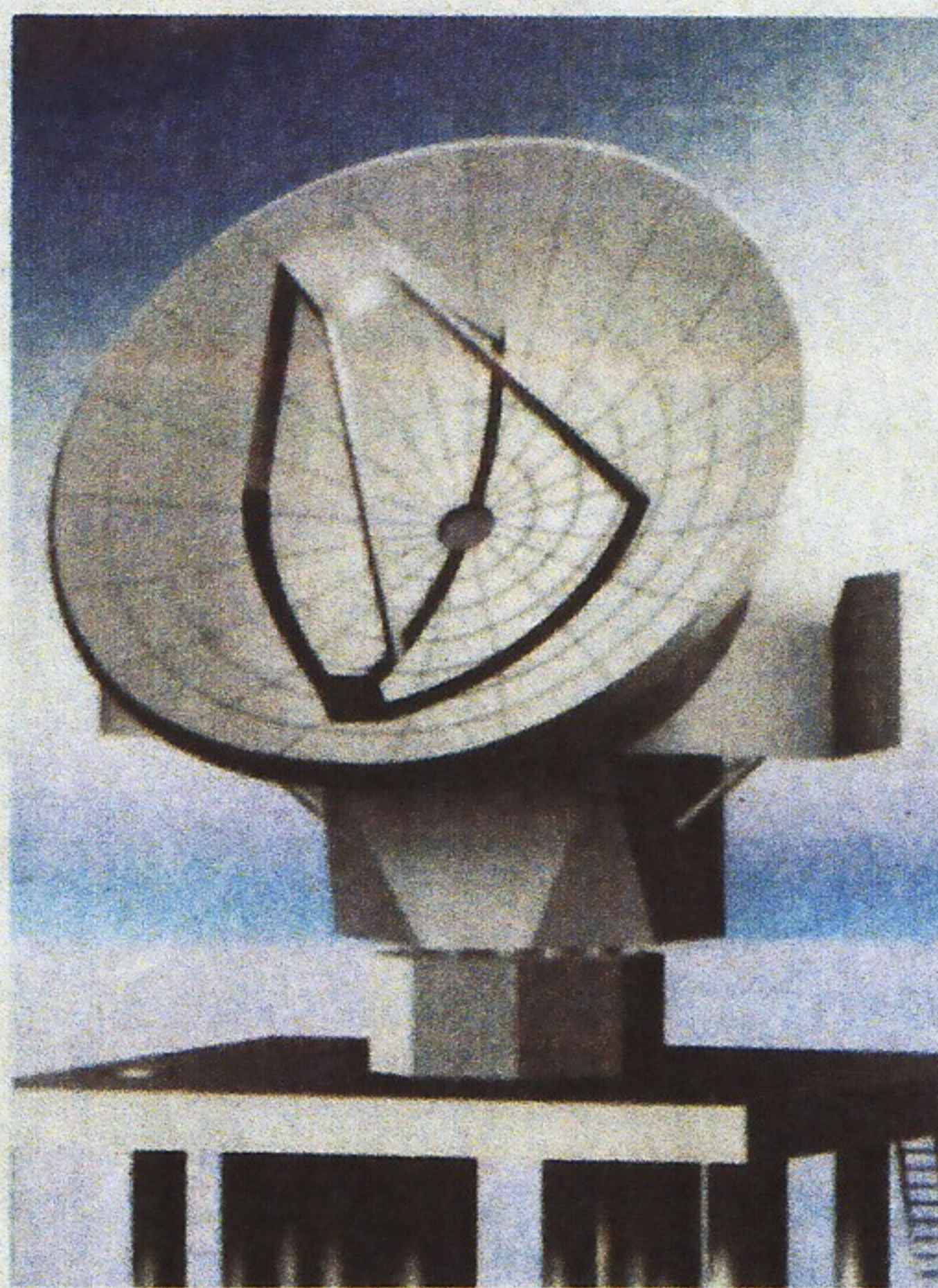
南極に新拠点構想

南極で新たな研究拠点をつくる動きが出てきた。筑波大学の中井直正教授らの研究グループは南極最大規模の天体望遠鏡をつくる計画だ。宇宙

の生まれたての銀河を探る狙いだ。国立極地研究所は移動式の掘削技術で100万年前の氷を探ることを目指している。

筑波大などが建設を目指すのは赤外線よりも波長が長い「サブミリ波」を観測できる直径10メートルの電波望遠鏡だ。イタリアとフランスの共同観測基地への設置を見込む。

同基地の標高は3233メートル。サブミリ波は空気



南極最大規模の天体望遠鏡の建設を目指す（イメージ）＝筑波大提供

筑波大や極地研

に含まれる水分によって屈折する。標高が高く空気が薄い同基地は好立地だ。狙うのは生まれたての銀河。星間ガスやちりが出すサブミリ波を観測できれば可視光で見えな

かった宇宙の姿が見え、銀河や星の誕生や進化の仕組み解明につながる。

この計画は大型プロジ

エクトの予算化の基となる日本学術会議の「マスタープラン」に選ばれた。建設費は約32億円になる見込みで、23年度ごろの組み立てを目指す。

極地研は簡易装置で2000～3000メートルの氷床を掘削できる拠点を計画。内陸部の「ドームふじ基地」近くに観測拠

点を設ける。雪や氷が積もり重なった氷床には過去の地球の大気が閉じ込められている。氷床をくりぬいて取り出した柱状の氷を分析すると、過去の気候の変化がわかる。

最古の氷と呼ばれているのは04年に欧州が掘った約80万年前の氷だ。日本はドームふじで約72万年前の氷を得ている。極地研は約100万年前の氷を掘りたい考えだ。